『心理学紀要』（明治学院大学）第 30 号　2020 年　1–12 頁

【原著】

送り手の集団成員性が受け手の感情共有や結びつきに及ぼす影響[1)]

田　中　知　恵（明治学院大学心理学部）
小　森　めぐみ（淑徳大学総合福祉学部）

要　約

受け手が送り手の感情を共有する状況について検討した。実験参加者に，送り手からターゲット人物のエピソードを伝えられる場面を想像させた。その際，送り手の集団成員性（内集団・外集団）と同一のエピソードに対する送り手の感情表出（つらい・おもしろい）を操作した。送り手の感情推測，受け手である実験参加者の感情，送り手に対する結びつき，ターゲット人物に対する送り手の態度推測，ターゲット人物に対する実験参加者の態度，送り手の行動への協調を測定した。その結果，“つらい”感情を表出した送り手が内集団成員である場合は外集団成員である場合よりも，受け手は送り手との結びつきを知覚して，送り手の行動に協調した。“おもしろい”感情を表出した送り手が外集団である場合は内集団である場合よりも受け手は送り手との結びつきを知覚した。コミュニケーション過程における感情共有の働きについて考察された。

キーワード：感情共有，送り手の集団成員性，結びつき

問　題

本研究の目的

社会心理学の領域で感情について検討する場合，これまでは主に記憶や情報処理に対する感情や感情制御の役割を取り上げてきた（e.g., Forgas, 2006, Gross, 2014）。すなわち，多くの研究では，個人内過程における感情の働きに注目していたのである。他方，個人間過程における感情の役割について実証的に検討した研究は多くはないが，人が感情を伴う情報を他者と共有すること（Christophe & Rimé, 1997, Rimé, 2007）や，送り手の感情を共有した受け手が，送り手に結びつき（coalition）を感じること（Peters & Kashima, 2007）などがこれまで明らかにされている。

これらの研究は，コミュニケーションを通じて人が感情を他者と共有する場合があることを示した。しかしながら，どういう状況においてより感情が共有されるのかという点に関しては検討が十分ではない。本研究では感情共有を，コミュニケーションの送り手と受け手がコミュニケーション内容に対して同じ感情状態を共有することと定義し，コミュニケーションの受け手において感情共有が生じる状況について検討する。

感情共有と社会的関係の構築

Peters & Kashima（2007）は第三者（ターゲット人物）のエピソードを用い，コミュニケーションにおける感情共有過程を検討した。研究では実験参加者にシナリオを呈示し，他の送り手からターゲット人物のエピソードを告げられる場面を想像させた。その際，エピソードに対して送り手が表出する感情を操作し，エピソードに適合する感情

もしくは適合しない感情を呈示した。たとえばあるエピソードでは“ターゲット人物は，お金をあげるふりをしながら盲目の大道芸人のギターボックスから 20 ドルを盗んだ”という内容に対して，半数の参加者には送り手が“怒り”感情を示しながら伝えてきた場面を想像させた（適合条件）。残り半数の参加者には送り手が“怖れ”感情を示しながら伝えてきた場面を想像させた（非適合条件）。参加者の感情状態についてたずねたところ，適合条件の参加者の方が非適合条件の参加者よりも送り手が表出した感情を強く回答した。つまり送り手の感情を共有したのである。また参加者の態度についてたずねたところ，適合条件の参加者の方が非適合条件の参加者よりも送り手に対して結びつきを感じていた。さらにターゲット人物に対する送り手の態度に協調した（Peters & Kashima, 2007, Study 2）[2)]。

上記の研究は，送り手の感情がコミュニケーション内容に適合しているほどその感情は共有されやすく，送り手に対する結びつきが感じられること，さらに送り手の態度と同じ態度がターゲット人物に対して形成されることを示している。すなわち受け手にとって感情共有が送り手との社会的関係性の構築において重要な役割を果たすのである。

送り手の集団成員性が受け手の感情共有に及ぼす影響

上記の研究で示されたように，感情共有が社会的関係性の構築に影響を及ぼすのであれば，送り手との関係性構築が重要である場合はそうでない場合よりも，受け手は送り手の感情を共有しようとする可能性がある。たとえば，送り手が内集団成員である場合，送り手が外集団成員である場合よりも受け手はその感情を共有すると考えられる。社会心理学研究においては，こうした集団成員性の影響が多く示されてきた。人には集団への所属欲求があるため（Baumeister, & Leary, 1995），集団成員の社会的アイデンティティは個人内過程や他者との相互作用過程に大きな影響を与える。たとえば，内集団への同一視の程度は集団における出来事と集団成員の心理的幸福感を媒介する（Bizumic, Reynolds, Turner, Bromhead, & Subasic, 2009）。また人は内集団成員を外集団成員より肯定的にとらえ，内集団成員に対し協調する（Robbins, & Krueger, 2005）。これらのことから，コミュニケーションの受け手として人は内集団成員が表出した感情を外集団成員が表出した感情よりも共有しようとする可能性が考えられる。

上記の点について検討するため，田中（2019）はシナリオを用いて研究を実施した。シナリオとして，受け手（実験参加者）が送り手からターゲット人物のエピソードを聞く内容が用いられた。研究ではコミュニケーションの送り手の集団成員性が操作され，送り手は受け手（実験参加者）の内集団成員もしくは外集団成員と説明された。また送り手の集団成員性の効果が送り手によって表出される感情特有のものではないことを確認するために，複数の感情が適合するエピソードが用いられた。そしてシナリオの中ではいずれかの感情を送り手が表出したことが説明された。どちらの条件においても，ターゲット人物は送り手の友人と説明された。具体的には，送り手（内集団成員もしくは外集団成員）の友人（ターゲット人物）が“テーマパークで恋人にひざまずいてプロポーズされた”というエピソードに対し，送り手が受け手に“憧れる”と伝える条件と“おもしろい”と伝える条件を設けた。内集団条件では,送り手を“大学で知り合った友人（女性）”と説明し，実験参加者がその相手と話しているときに，相手がそのエピソードを話したことを想像させた。外集団条件では送り手を“電車で隣に座っている人たち（女性）”と説明し，実験参加者が電車に乗っていると，その人たちの会話が聞こえてきたことを想像させた。そして，送り手の感情推測，受け手である参加者の感情，送り手に対する態度，ターゲット人物に対する送り手の態度推測，ターゲット人物に対する参加者の態度などに回答を求めた。

その結果，受け手である参加者の感情において，“憧れる”と伝えられた条件では送り手の集団成員性による影響は見られなかったが，“おもしろい”と伝えられた条件では，集団成員性による影響が認められた。送り手が内集団成員である場合

には，送り手によって表出された感情を表出されなかった感情よりも参加者は強く感じていたが，送り手が外集団成員である場合には，送り手によって表出された感情と表出されなかった感情を感じる強さには差がなかった。この結果は感情共有に関する予測を支持するものであった。またターゲット人物に対する送り手の態度推測とターゲット人物に対する受け手の態度の間，さらに送り手に対する態度とターゲット人物に対する受け手の態度との間にも正の相関が認められた。このことは，受け手がターゲット人物に対する送り手の態度推測や送り手に対する自身の態度に基づいて，未知のターゲット人物に対する態度を形成する可能性を示唆するものであった。

本研究における変更点と予測

上記の研究により，送り手が内集団成員である場合の方が，外集団成員である場合よりも，受け手はその感情をより共有することが示された。ただし研究にはいくつか検討すべき点や改善すべき点があった。こうした問題点を改善しても同様の効果が認められるか検討するため，本研究では田中（2019）の研究から以下の点を変更する。

第一の変更点は，研究で用いるエピソードや感情の内容である。先の研究では予測した効果は2つの感情の一方でのみ認められたものであった。効果がその感情特有のものでないか確認するためにはエピソードや感情内容を変えても同様の効果が認められるのか実証的に検討する必要がある。よって本研究では再度予備調査を実施して複数の感情が適合するエピソードを収集し，新たなシナリオを作成する。

第二の変更点は集団成員性の操作方法である。先の研究では，内集団条件では送り手（友人）が受け手（参加者）に話しかける状況をシナリオで示した。しかし外集団条件では送り手が受け手に直接的に話しかけるのではなく，送り手（見知らぬ他者）が別の人に対して話しているのを受け手（参加者）が聞くという状況をシナリオで示した。こうした状況の相違が結果に影響を与えた可能性がある。本研究ではこの点を統制して検討するため，内集団条件・外集団条件のいずれにおいても，受け手（実験参加者）は送り手が他者に対してターゲット人物のエピソードを話しているのを聞くという状況に統一する。

上記の変更点を踏まえ，本研究の予測をまとめると以下のようになる。コミュニケーションの受け手は，送り手が内集団成員である場合に外集団成員である場合よりも，ターゲット人物に対する送り手の感情を共有し，送り手との結びつきを知覚するだろう。また送り手の態度と同様の態度をターゲット人物に対して持ち，送り手の行動に協調するだろう。

方　法

予備調査

実験で用いるエピソードを選出するため予備調査を実施した。実験参加者と同じ大学の学生5名に協力を依頼し，複数の感情を感じると思われるエピソードを収集した。収集したエピソードの中から本実験の刺激として妥当と思われるエピソードを相談しながら選出した。エピソードは“送り手の友人（ターゲット人物）がサッカー練習中に勢い余ってボールに乗ってしまい怪我をした”という内容のものであった。このエピソードに適合する感情として“つらい”“おもしろい”という感情を用いることにし，シナリオを作成した。

実験デザイン

送り手の集団成員性（内集団・外集団）×感情（つらい・おもしろい）の参加者間要因であった。

実験参加者

都内私立大学の学生51名（男性23名　女性28名）を研究の対象とした。平均年齢は20.04歳（$SD = 0.98$）であった。各条件の人数は11名～13名であった。

送り手の集団成員性の操作

実験シナリオの内容によって送り手の集団成員性を操作した。内集団条件では，“あなたは仲の

良い友人 2 人とカフェで待ち合わせをしていましたが，バイトのため少し遅れてしまいました。友人たちに合流したところ，その 2 人が以下の内容を話していました。”というシナリオを呈示し，その状況を想像するように参加者に求めた。外集団条件では，“あなたは今，バイト先のカフェで働いています。来店した 2 人組のお客さんに飲み物を運んで行ったところ，その 2 人が以下の内容を話していました。”というシナリオを呈示し，その状況を想像するように求めた。

送り手の表出する感情の操作

“つらい”条件では，送り手が第三者（送り手の友人）のエピソードを話した後に“つらくない!?”と続けたことを示した。“おもしろい”条件では，送り手が“おもしろくない!?”と続けたことを示した。

手続き

参加者には“コミュニケーションに関する調査”と説明し研究への参加を依頼した。その際，内容が参加者に負担を与えるものではないことや，途中でやめたくなった場合にはいつでもやめられることを告げた。これらのことに同意を得た上で，質問紙を配布し回答を求めた。

参加者にはシナリオの場面（カフェで友人たちに合流する or バイト先のカフェで働いている）を呈示し，その際の状況（友人たちの会話を聞く or お客さんたちの会話を聞く）を想像するよう教示した（場面と状況のいずれも前者が内集団条件，後者が外集団条件）。そしてその会話として“友人の A がさ，サッカーの練習で勢い余ってボールに乗っちゃったんだって。しかも肩から落ちて脱臼までしたんだよ！”というターゲットのエピソードと，送り手の感情（つらくない!? or おもしろくない!?）を呈示し，参加者に従属変数への回答を求めた。

従属変数

質問項目において，送り手のことを内集団条件では“話し手（友人）”，外集団条件では“話し手（カフェの客）”と記述した。

参加者は“話し手は今，以下の感情をどのくらい感じていると思いますか”と質問され，送り手の感情推測を 8 項目（つらさ，おもしろさ，楽しさ，怖さ，驚き，羨ましさ，良い気分，悪い気分）に対して回答した。次に“あなたは話し手の話を聞いて，以下の感情をどのくらい感じていますか”と質問され，受け手である自分の感情を上記と同じ 8 項目に対して回答した。続けて“話し手に対するあなたのお考えをお答えください”と教示され“話し手は信頼できる”“話し手に結びつきを感じる”など，送り手との結びつきに関する 8 項目に回答した。

その後，参加者は“話し手は，A さんに対してどのように思っているでしょうか”と質問され，ターゲット人物に対する送り手の態度推測 2 項目に回答した（“話し手は A さんが好ましいと思っている”，“話し手は A さんが好ましくないと思っている（逆転）”）。続けて“あなたは A さんに対してどのように思いますか”と質問され，ターゲット人物に対する自分の態度 2 項目に回答した（“あなたは A さんが好ましいと思う”，“あなたは A さんが好ましくないと思う（逆転）”）。

最後に送り手がターゲットに対して取る行動への協調の程度を測定するために“話し手と A さんが以下の行動を取っていることを想像してください”と教示され，2 項目の質問に対し，話し手と同じ行動を取るか回答した（“話し手が A さんと話をしている。あなたも話に加わるか”，“話し手は A さんにノートを貸してほしいと頼まれたが，断った。あなたも頼まれたら断るか（逆転）”）。

参加者には，いずれの従属変数に対しても 7 件法で回答を求めた（1：全くそう思わない―7：非常にそう思う）。

質問紙への回答を終えた参加者に，わからなかった点や疑問に感じた点がなかったかたずねた。そうした点がないことを確認した後，参加者に感謝を伝えて実験を終了した。

結　果

送り手の感情推測

シナリオ中で送り手が表出していたのは“つらさ”もしくは“おもしろさ”の感情であった。

“つらさ”感情に対する2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったところ，感情の主効果のみ有意であった（$F(1, 46)=10.61$, $p<.01$, $\eta_{p^2}=.187$）。“おもしろい”条件（$M=1.88$, $SD=1.36$）は“つらい”条件（$M=3.31$, $SD=1.74$）よりも得点が低かった。

“おもしろさ”感情に対する2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったところ，感情の主効果（$F(1, 47)=7.00$, $p<.05$, $\eta_{p^2}=.130$）のみ有意であった。“おもしろい”条件（$M=5.62$, $SD=1.58$）は“つらい”条件（$M=4.26$, $SD=2.01$）よりも得点が高かった。

送り手の感情推測について，他にたずねた項目に対しても同様の2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行った。その結果，“楽しさ”感情に対して，感情の主効果のみ有意に認められ（$F(1, 46)=6.28$, $p<.05$, $\eta_{p^2}=.120$），“おもしろい”条件（$M=4.87$, $SD=1.96$）は“つらい”条件（$M=3.54$, $SD=1.79$）よりも得点が高かった。“怖さ”感情に対して，感情の主効果のみ有意に認められ（$F(1, 45)=7.98$, $p<.01$, $\eta_{p^2}=.151$），“おもしろい”条件（$M=2.00$, $SD=1.35$）は“つらい”条件（$M=3.35$, $SD=1.85$）よりも得点が低かった。“驚き”感情に対して，集団成員性×感情の交互作用効果のみ有意に認められた（$F(1, 46)=5.92$, $p<.05$, $\eta_{p^2}=.114$）。内集団条件において“つらい”群（$M=5.15$, $SD=1.73$）は“おもしろい”群（$M=3.85$, $SD=1.57$）よりも得点が高かった（$F(1, 46)=4.53$, $p<.05$, $\eta_{p^2}=.090$）。外集団条件において“おもしろい”群（$M=5.55$, $SD=1.50$）と“つらい”群（$M=4.69$, $SD=1.75$）には差がなかった（$F(1, 46)=1.77$, ns, $\eta_{p^2}=.037$）。“つらい”条件では，内集団群（$M=5.15$, $SD=1.73$）と外集団群（$M=4.69$, $SD=1.75$）に差は見られなかったが（$F(1, 46)<1$, ns, $\eta_{p^2}=.012$），“おもしろい”条件において外集団群（$M=5.55$, $SD=1.04$）は内集団群（$M=3.85$, $SD=1.57$）よりも得点が高かった（$F(1, 46)=7.01$, $p<.05$, $\eta_{p^2}=.132$）。また“羨ましさ”感情に対しても，集団成員性×感情の交互作用効果のみ有意に認められた（$F(1, 46)=4.46$, $p<.05$, $\eta_{p^2}=.088$）。内集団条件において“つらい”群（$M=1.08$, $SD=0.28$）は“おもしろい”群（$M=1.85$, $SD=1.73$）よりも得点が低い傾向が認められた（$F(1, 46)=2.95$, $p<.10$, $\eta_{p^2}=.060$）。外集団条件において“つらい”群（$M=1.69$, $SD=1.38$）と“おもしろい”群（$M=1.09$, $SD=0.30$）には差が見られなかった（$F(1, 46)=1.64$, ns, $\eta_{p^2}=.035$）。“つらい”条件では，内集団群（$M=1.08$, $SD=0.28$）と外集団群（$M=1.69$, $SD=1.38$）に差は見られず（$F(1, 46)=1.87$, ns, $\eta_{p^2}=.039$），“おもしろい”条件においても内集団群（$M=1.85$, $SD=1.73$）と外集団群（$M=1.09$, $SD=0.30$）には差が見られなかった（$F(1, 46)=2.59$, ns, $\eta_{p^2}=.053$）。“良い気分”に対しては，感情の主効果のみ有意に認められ（$F(1, 46)=8.77$, $p<.01$, $\eta_{p^2}=.160$），“つらい”条件（$M=2.38$, $SD=1.33$）は“おもしろい”条件（$M=3.83$, $SD=2.12$）よりも得点が低かった。“悪い気分”に対しては，感情の主効果のみ有意に認められ（$F(1, 46)=5.67$, $p<.05$, $\eta_{p^2}=.110$），“おもしろい”条件（$M=1.79$, $SD=1.32$）は“つらい”条件（$M=2.77$, $SD=1.51$）よりも得点が低かった。

受け手である参加者の感情

受け手である参加者の感情についてたずねた項目得点のうち，“つらさ”感情に対する2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったが，条件間に有意な差は認められなかった（$Fs\ (1, 46)<1$, ns, $\eta_{p^2}<.054$）。

“おもしろさ”感情に対する2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったが，条件間に有意な差は認められなかった（$Fs(1, 46)<1$, ns, $\eta_{p^2}<.010$）。

受け手である参加者の感情について，他にたずねた項目に対しても同様の2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行った。その結果，“怖さ”感情に対して，感情の主効果のみ有意に認められ（$F(1, 47)=7.01$, $p<.05$, $\eta_{p^2}=.130$），“つらい”条件（$M=4.52$, $SD=1.91$）は“おもしろい”条件（$M=$

3.12, *SD*=1,73）よりも得点が高かった。その他の感情に対しては条件間に差は見られなかった。

送り手との結びつき

送り手との結びつきについてたずねた 8 項目には高い信頼性が認められたため（α=.89），項目得点を合計した（得点の範囲：8〜56）。この得点に対し，2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったところ，感情の主効果（$F(1, 45)=3.35$, $p<.10$, $\eta_p^2=.069$）ならびに集団成員性×感情の交互作用効果が有意に認められた（$F(1, 45)=11.90$, $p<.01$, $\eta_p^2=.209$）。内集団条件において“おもしろい”群（*M*=18.54, *SD*=8.17）は“つらい”群（*M*=31.23, *SD*=7.05）よりも得点が低かった（$F(1, 45)<14.98$, $p<.01$, $\eta_p^2=.250$）。外集団条件において“つらい”群（*M*=22.31, *SD*=6.74）と“おもしろい”群（*M*=26.20, *SD*=11.56）には差が見られなかった（$F(1, 45)=1.22$, *ns*, $\eta_p^2=.026$）。“つらい”条件では，外集団群（*M*=22.31, *SD*=6.74）は内集団群（*M*=31.23, *SD*=7.05）よりも得点が低く（$F(1, 45)=7.40$, $p<.01$, $\eta_p^2=.141$），“おもしろい”条件において内集団群（*M*=18.54, *SD*=8.17）は外集団群（*M*=26.20, *SD*=11.56）よりも得点が低かった（$F(1, 45)=4.75$, $p<.01$, $\eta_p^2=.095$）。送り手との結びつき得点の平均値を図 1 に示す。

ターゲット人物に対する送り手の態度推測

ターゲット人物に対する送り手の態度推測についてたずねた 2 項目の得点には有意な相関が認められたため（$r=.43$, $p<.01$），合計して態度推測得点を作成した（得点の範囲：2〜14）。この得点に対する 2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったが，有意な効果は認められなかった（Fs $(1, 46)<1$, *ns*, $\eta_p^2<.015$）。

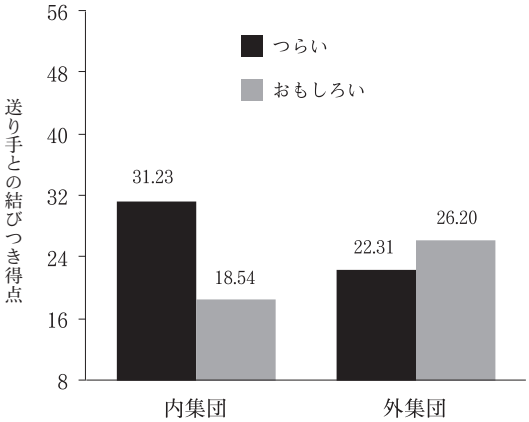

図 1　送り手との結びつき得点

ターゲット人物に対する受け手の態度

ターゲット人物に対し，受け手である参加者の態度をたずねた 2 項目の得点には有意な相関が認められなかったため（$r=.18$, *ns*），各項目得点に対する 2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行った。その結果，いずれの項目に対しても条件間に有意な差は認められなかった（Fs$(1, 46)<2.57$, *ns*, $\eta_p^2<.053$）。

送り手に対する行動の協調

送り手がターゲットに対して取る行動への協調に関してたずねた 2 項目の得点には有意な相関が認められたため（$r=.37$, $p<.01$），合計して行動の協調得点を作成した（得点の範囲：2〜14）。この得点に対し，2（集団成員性）×2（感情）の分散分析を行ったところ，集団成員性の主効果（$F(1, 46)=18.99$, $p<.001$, $\eta_p^2=.292$）ならびに集団成員性×感情の交互作用効果が有意に認められた（$F(1, 46)=5.47$, $p<.05$, $\eta_p^2=.106$）。内集団条件において“つらい”群（*M*=10.15, *SD*=2.41）は“おもしろい”群（*M*=8.46, *SD*=2.30）よりも得点が高かった（$F(1, 46)=2.86$, $p<.05$）。外集団条件において“つらい”群（*M*=5.31, *SD*=3.09）と“おもしろい”群（*M*=7.00, *SD*=2.28）には差が見られなかった（$F(1, 46)=2.62$, *ns*, $\eta_p^2=.054$）。“つらい”条件では，内集団群（*M*=10.15, *SD*=2.41）は外集団群（*M*=5.31, *SD*=3.09）よりも得点が高く（$F(1, 46)=23.43$, $p<.01$, $\eta_p^2=.337$），“おもしろい”条件において内集団群（*M*=8.46, *SD*=2.30）は外集団群（*M*=7.00, *SD*=2.28）には差が見られなかった（$F(1, 46)=1.95$, *ns*, $\eta_p^2=.041$）。行動の協調得点の平均値を図 2 に示す。

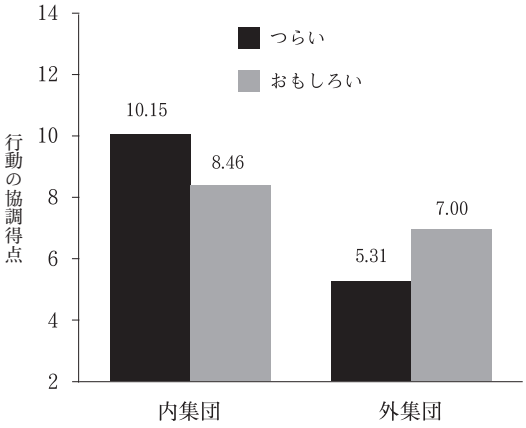

図 2　行動の協調得点

送り手の感情推測と受け手の感情の関連

参加者が送り手の“つらさ”感情を推測した得点と，受け手の“つらさ”感情得点には，有意な相関が認められた（r=.40, p<.01）。この変数間の関連を群ごとに検討したところ，内集団・“つらい”群でのみ有意な相関が認められ（r=.77, p<.01），他の群では有意な相関が見られなかった（rs<.26, ns）。

参加者が送り手の“おもしろさ”感情を推測した得点と，受け手の“おもしろさ”感情得点には，有意な相関が認められた（r=.43, p<.001）。この変数間の関連を群ごとに検討したところ，内集団・“つらい”群では有意な相関が認められたが（r=.93, p<.001），内集団・“おもしろい”群では相関が認められなかった（r=.08, ns）。他方，外集団・“つらい”群では有意な相関が認められず（r=.10, ns），外集団・“おもしろい”群では相関のある傾向が認められた（r=.58, p<.10）。

送り手の態度推測と受け手の態度の関連

ターゲット人物に対する送り手の態度推測得点と，ターゲット人物に対する受け手の態度をたずねた 2 項目の各得点の関連を検討した。送り手の態度推測得点と受け手の態度 1 項目の得点（“あなたは A さんが好ましいと思う”）には有意な相関が見られず（r=13, ns），さらに群ごとに検討した場合でもいずれの群においても相関は見られなかった（rs<.41, ns）。送り手の態度推測得点ともうひとつの受け手の態度項目得点（“あなたは A さんが好ましくないと思う（逆転）”）との間には有意な相関が認められた（r=.48, p<.001）。この変数間の関連を群ごとに検討したところ，外集団・“つらい”群（r=.48, p<.10）ならびに外集団・“おもしろい”群（r=.66, p<.05）でのみ有意な相関が認められ，他の群では有意な相関が見られなかった（rs<.46, ns）。

なお，送り手の態度推測得点と行動の協調得点，受け手の態度得点と行動の協調得点との間にも有意な相関は認められなかった（rs<.03, ns）。

送り手との感情の一致度が送り手との結びつきに及ぼす影響

送り手の“つらさ”感情に対する推測と，受け手自身の“つらさ”感情との一致度が，送り手との結びつきに及ぼす影響について検討した。

“送り手の“つらさ”感情推測得点と受け手の“つらさ”感情得点との差分を算出した。差分の度数分布を確認し，差がなかった 22 名を一致度高群，絶対値が 1 以上であった 27 名を一致度低群とした。そして送り手との結びつき得点に対する 2（集団成員性）×2（一致度）の分散分析を行ったところ，一致度の主効果（F(1, 45)=3.93, p<.10, η_{p^2}=.080）ならびに集団成員性×一致度の交互作用効果が有意である傾向が認められた（F(1, 45)=2.97, p<.10, η_{p^2}=.062）。内集団条件において一致度高群（M=25,25, SD=9.64）と一致度低群（M=24.57, SD=10.49）には差が見られなかったが（F(1, 45)<1, ns, η_{p^2}=.001），外集団条件において一致度低群（M=19.77, SD=8.76）は一致度高群（M=29.50, SD=6.49）よりも得点が低かった（F(1,45)=6.46, p<.05, η_{p^2}=.209）。一致度高条件では，内集団群（M=25.25, SD=9.64）と外集団群（M=29.50, SD=6.49）には差が見られず（F(1, 45)=1.19, ns, η_{p^2}=.026），一致度低条件においても内集団群（M=24.57, SD=10.49）と外集団群（M=19.77, SD=8.76）には差が見られなかった（F(1, 45)=1.87, ns, η_{p^2}=.040）。送り手との結びつき得点の平均値を図 3 に示す。

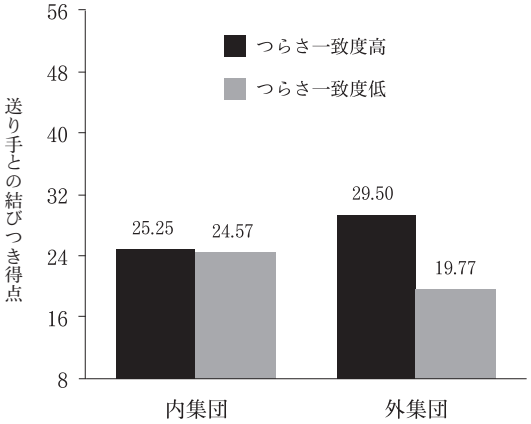

図 3　送り手との結びつき得点

同様に，送り手の“おもしろさ”感情に対する推測と，受け手自身の“おもしろさ”感情との一致度が，送り手との結びつきに及ぼす影響について検討した。

送り手の“おもしろさ”感情推測得点と受け手の“おもしろさ”感情得点との差分を算出した。差分の度数分布を確認し，絶対値が 1 であった 29 名を一致度高群，2 以上であった 20 名を一致度低群とした。そして送り手との結びつき得点に対する 2（集団成員性）×2（一致度）の分散分析を行ったところ，一致度の主効果のみが有意に認められた（$F(1, 45)=10.07$, $p<.01$, $\eta_{p^2}=.183$）。一致度低群（$M=19.65$, $SD=7.58$）は一致度高群（$M=27.79$, $SD=9.28$）よりも得点が低かった。

送り手との感情の一致度がターゲット人物に対する送り手の態度の推測に及ぼす影響

送り手の“つらさ”感情に対する推測と，受け手自身の“つらさ”感情との一致度が，送り手のターゲット人物に対する態度の推測に及ぼす影響について検討した。送り手の態度の推測得点に対する 2（集団成員性）×2（一致度）の分散分析を行ったところ，有意な効果は認められなかった（Fs$(1, 46)<2.63$, ns, $\eta_{p^2}=.054$）。

同様に，送り手の“おもしろさ”感情に対する推測と，受け手自身の“おもしろさ”感情との一致度が，送り手のターゲット人物に対する態度の推測に及ぼす影響について検討した。送り手の態度推測得点に対する 2（集団成員性）×2（一致度）の分散分析を行ったところ，有意な効果は認められなかった（Fs$(1, 46)<1.75$, ns, $\eta_{p^2}=.037$）。

送り手との感情の一致度がターゲット人物に対する受け手の態度に及ぼす影響

送り手の“つらさ”感情に対する推測と，受け手自身の“つらさ”感情との一致度が，受け手のターゲット人物に対する態度に及ぼす影響について検討した。受け手の態度を測定した 2 項目の各得点に対する 2（集団成員性）×2（一致度）の分散分析を行ったところ，いずれの項目においても有意な効果は認められなかった（Fs$(1, 46)<2.61$, ns, $\eta_{p^2}=.054$）。

同様に，送り手の“おもしろさ”感情に対する推測と，受け手自身の“おもしろさ”感情との一致度が，受け手のターゲット人物に対する態度に及ぼす影響について検討した。受け手の態度を測定した 2 項目の各得点に対する 2（集団成員性）×2（一致度）の分散分析を行ったところ，いずれの項目においても有意な効果は認められなかった（Fs$(1, 46)<2.21$, ns, $\eta_{p^2}=.046$）。

送り手との感情の一致度が行動の協調に及ぼす影響

送り手の“つらさ”感情に対する推測と，受け手自身の“つらさ”感情との一致度が，行動の協調に及ぼす影響について検討した。行動の協調得点に対する 2（集団成員性）×2（一致度）の分散分析を行ったところ，集団成員性の主効果（$F(1, 46)=16.96$, $p<.01$, $\eta_{p^2}=.269$）ならびに集団成員性×一致度の交互作用効果が有意に認められた（$F(1,46)=5.12$, $p<.05$, $\eta_{p^2}=.100$）。内集団条件において一致度高群（$M=8.75$, $SD=2.42$）と一致度低群（$M=9.79$, $SD=2.49$）には差が見られなかったが（$F(1, 46)<1$, ns, $\eta_{p^2}=.023$），外集団条件において一致度低群（$M=5.14$, $SD=2.71$）は一致度高群（$M=7.40$, $SD=2.55$）よりも得点が低かった（$F(1, 46)=4.38$, $p<.05$, $\eta_{p^2}=.090$）。一致度高条件では，内集団群（$M=8.75$, $SD=2.42$）と外集団群（$M=7.40$, SD

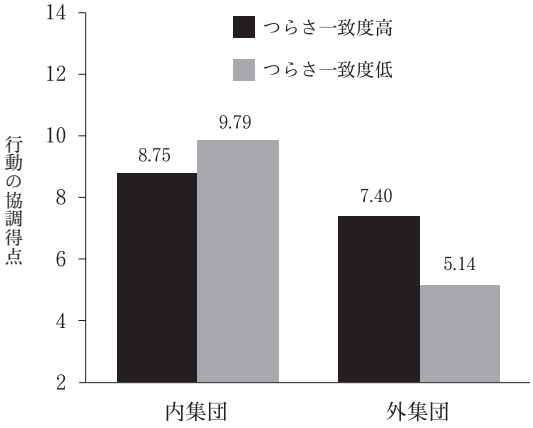

図 4　行動の協調得点

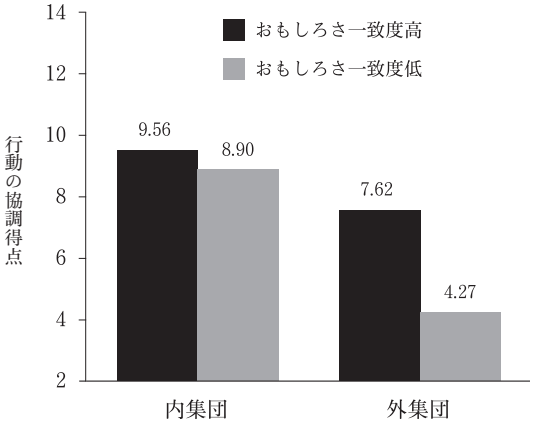

図 5　行動の協調得点

=2.55）には差が見られなかったが（$F(1, 46)=1.53$, *ns*, $\eta_{p^2}=.032$），一致度低条件において内集団群（$M=9.79$, $SD=2.49$）は外集団群（$M=5.14$, $SD=2.71$）よりも得点が高かった（$F(1, 46)=23.24$, $p<.01$, $\eta_{p^2}=.336$）。行動の協調得点の平均値を図 4 に示す。

同様に，送り手の“おもしろさ”感情に対する推測と，受け手自身の“おもしろさ”感情との一致度が，行動の協調に及ぼす影響について検討した。行動の協調得点に対する 2（集団成員性）×2（一致度）の分散分析を行ったところ，集団成員性の主効果（$F(1, 46)=22.62$, $p<.01$, $\eta_{p^2}=.330$），一致度の主効果（$F(1, 46)=8.40$, $p<.01$, $\eta_{p^2}=.154$）が有意に認められた。また集団成員性×一致度の交互作用効果が有意である傾向が認められた（$F(1, 46)=5.79$, $p<.10$, $\eta_{p^2}=.076$）。内集団条件において一致度高群（$M=9.56$, $SD=2.37$）と一致度低群（$M=8.90$, $SD=2.69$）には差が見られなかったが（$F(1, 46)<1$, *ns*, $\eta_{p^2}=.010$），外集団条件において一致度低群（$M=4.27$, SD=2.24）は一致度高群（$M=7.62$, $SD=2.36$）よりも得点が低かった（$F(1, 46)=11.51$, $p<.001$, $\eta_{p^2}=.200$）。一致度高条件では，内集団群（$M=9.56$, $SD=2.37$）は外集団群（$M=7.62$, $SD=2.36$）よりも得点が高く（$F(1, 46)=4.70$, $p<.05$, $\eta_{p^2}=.093$），一致度低条件において内集団群（$M=8.90$, $SD=2.69$）は外集団群（$M=4.27$, $SD=2.24$）よりも得点が高かった（$F(1, 46)=19.39$, $p<.01$, $\eta_{p^2}=.230$）。行動の協調得点の平均値を図 5 に示す。

考　察

送り手の感情推測の結果より，同じエピソードに対する感情であっても，送り手が表出した感情は，そうでない感情よりも大きく推測されることが示された。また，送り手が表出していない感情においても感情条件による差が認められ，“楽しさ”感情の推測は“おもしろい”と表出された場合の方が“つらい”と表出された場合よりも大きかった。対照的に，“怖さ”感情の推測は“おもしろい”と表出された場合の方が“つらい”と表出された場合よりも小さかった。さらに“驚き”感情の推測は内集団成員によって“つらい”と表出された場合の方が“おもしろい”と表出された場合よりも大きく，“おもしろい”と表出された場合には送り手が外集団成員であると内集団成員の時よりも大きく感情推測された。“羨ましさ”感情の推測は内集団によって“つらい”と表出された場合の方が“おもしろい”と表出された場合よりも小さかった。これらのことから，受け手は送り手が表出した感情だけでなく関連する感情も送り手の感情として推測すること，またその推測は送り手の集団成員性により影響を受ける場合もあることが示唆された。

受け手は，内集団成員の送り手によって表出された感情を外集団の送り手によって表出された感情よりも強く感じるだろうと予測していたが，本

研究においてそうした効果は認められなかった。ただし送り手が“つらい”感情を表出した場合，送り手が内集団成員であると外集団成員のときよりも送り手に対して参加者は結びつきを高く知覚し，また相手の行動に協調しようとした。他方，送り手が“おもしろい”感情を表出した場合には，送り手が外集団成員であると内集団成員のときよりも参加者は結びつきを高く知覚した。このことは，同じ感情が表出された場合でも，送り手の集団成員性によって送り手との結びつきや行動へ協調が異なることを示している。

送り手によって表出された感情の内容に関わらず，送り手の感情推測と受け手の感情との間には有意な正の相関が認められた。しかし，群ごとに両者の関連を検討すると，“つらさ”感情においては送り手が内集団成員でありさらに“つらい”感情を表出した場合のみに有意な正の相関が認められた。“おもしろさ”感情においては送り手が内集団成員であり“つらい”感情を表出した場合と，送り手が外集団成員であり“おもしろい”感情を表出した場合においてのみ正の相関が認められた。本研究では，送り手が内集団成員である場合の方が，受け手はその感情を共有すると予測していた。そのため，内集団成員の送り手の感情推測と受け手の感情の関連は，特に送り手によって表出された感情に対してたずねた場合に高いと考えていた。“つらい”感情が表出された場合にはその予測と一貫する結果が示されたが，“おもしろい”感情が表出された場合には異なる結果が示された。また本研究では，送り手が内集団成員である場合の方が外集団成員である場合よりも，受け手は送り手の態度と同様の態度をターゲット人物に対して持つと予測していた。送り手の態度推測と受け手の態度の関連を検討したところ，両者の関連は受け手の態度を測定した 2 項目のうち 1 項目でのみ認められたが，群ごとに検討すると外集団条件においてのみ有意であった。またこれらの変数と送り手への行動の協調にも関連は認められなかった。これらの結果は本研究で用いたエピソードや感情の影響による可能性もあり，今後の検討が必要である。

送り手の感情に対する推測と，受け手自身の感情との一致度が，送り手との結びつきに及ぼす影響について検討したところ，送り手が内集団成員である場合，また送り手が外集団成員である場合にも“つらさ”感情の一致度が高い場合には，受け手は送り手に対して結びつきを知覚することが示された。また送り手との行動の協調も認められた。このような外集団成員である送り手との行動の協調は，“おもしろさ”感情の一致度が高い場合にも認められた。送り手との結びつきや行動の協調は，内集団成員である送り手に対して生じるだけでなく，送り手の感情が共有できる場合には外集団成員に対しても生じることが示された。

送り手の感情が共有される場合の方が，送り手に対する態度が肯定的になることは田中（2019）においても見いだされていた。本研究の結果は，さらにそうした効果が集団成員性の影響を超えて生じる可能性を示すものである。また本研究により，受け手が送り手の感情を共有するほど送り手の行動に協調することも示された。Peters & Kashima（2007）の研究では，送り手の表出した感情がコミュニケーション内容に適合していると，感情が共有されて送り手との結びつきが知覚され，ターゲット人物に対し同様の態度が生じた。ただしそうした結果が示された理由として，適合しない感情を表出した送り手を受け手が否定的に捉えた可能性があった。本研究では適合する複数の感情を用いて検討し上記の可能性を排除した上，さらに感情共有の効果が態度だけでなく行動傾向にも及ぶことを示した。

本研究により，感情の共有は送り手の集団成員性だけではなく，その内容によっても影響を受けることが示された。今後の課題としては取り上げる感情の内容を変えて同様の効果が認められるのか実証的に検討する必要がある。本研究では，“つらい”“おもしろい”というふたつの感情を取り上げて検討したが，両者の肯定性の程度が異なっていた可能性ある。送り手が“おもしろい”と表出した場合の方が“つらい”と表出した場合よりも“楽しさ”の感情は高く推測され“怖さ”の感情は低く推測された。また同じエピソードに対す

る感情であっても，両者が生じる過程が異なっていた可能性もある。たとえば“つらさ”という感情はエピソードのターゲット人物に焦点化した場合に生じやすく，“おもしろさ”という感情はエピソードの状況に焦点化した場合に生じやすいかもしれない。こうした感情の質や感情が生じる過程の影響については今後の検討課題である。

研究の展望として，感情共有が集団の態度や行動形成において果たす役割の検討が挙げられる。社会心理学研究により，他者に対する態度が共有された認知に基づいて形成されることが明らかにされてきた。他者に対する態度や行動は，こうした認知の共有に加えて感情の共有によっても生じる可能性がある。本研究では，受け手が送り手の感情を共有する状況に関して検討した。今後は，受け手が次に送り手となって他者に感情を伝達する状況を取り上げ，感情共有がどのような影響を集団において果たすのか検討する必要性があるだろう。

注

1）本研究の一部は，JSPS 科研費 JP18K03017（研究代表者：田中知恵）の助成を受けて実施された。
本研究の一部は，日本社会心理学会第 60 回大会において発表された。

2）Peters & Kashima（2007）の Study 2 では，本文中に示した“怒り”感情に適合するエピソードのほか，“嫌悪”“称賛”“恐怖”の各感情にも適合するエピソードが呈示された。研究では，従属変数に対する感情による相違についても検討しており，たとえば送り手に対する態度は，“称賛”エピソードが話された場合に最も肯定的であることなどを見出している。本論文では結果の詳細については省略する。また研究では，ターゲット人物のアイデンティティも操作されていた。半数の参加者には，ターゲット人物として個人名を告げ，残り半数の参加者には他大学の学生のひとりであると告げた。しかしこの要因は従属変数に影響を与えていなかった。

引用文献

Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin,* **117**, 497–529.

Bizumic, B., Reynolds, K. J., Turner, J. C., Bromhead, D., & Subasic, E. (2009). The role of the group in individual functioning: School identification and the psychological well-being of staff and students. *Applied Psychology: An International Review,* **58**, 171–192.

Christophe, V., & Rimé, B. (1997). Exposure to the social sharing of emotion: Emotional impact, listener responses and secondary social sharing. *European Journal of Social Psychology,* **27**, 37–54.

Forgas, J.P. (2006). *Affect in Social Thinking and Behavior.* New York: Psychology Press.

Gross, J. J. (2013). *Handbook of Emotion Regulation (2nd ed).* New York, NY: The Guilford Press.

Peters, K., & Kashima, Y. (2007). From social talk to social action: Shaping the social triad with emotion sharing. *Journal of Personality and Social Psychology,* **93**, 780–797.

Rimé, B. (2007). The social sharing of emotion as an interface between individual and collective processes in the construction of emotional climates. *Journal of Social Issues,* **63**, 307–322.

Robbins, J. M., & Krueger, J. I. (2005). Social projection to ingroups and outgroups: A review and meta-analysis. *Personality and Social Psychology Review,* **9**, 32–47.

田中知恵（2019）．送り手の集団成員性が受け手の感情共有に及ぼす影響 明治学院大学心理学紀要，**29**，19–30.

Effects of group membership of senders on affect sharing and coalition of receivers

Tomoe TANAKA
(Faculty of Psychology, Meiji Gakuin University)

Megumi KOMORI
(College of Integrated Human and Social Welfare Studies, Shukutoku University)

Abstract

The conditions under which the receivers of communication share the sender's affect were investigated. Participants were instructed to imagine a situation in which the sender of communication informed them about an episode related to the target person. The sender's group membership (ingroup or outgroup) and their affective expression of identical episodes (hard or humorous) were manipulated. The inference of sender's affect, participant's own affect as the receiver, the coalition with the sender, the inference of sender's attitude towards the target person, participant's attitude towards the target person, and the action coordination to the senders were assessed. Results suggested that the participants perceived the coalition with the senders who expressed hard affect, and showed action coordination to them when the senders were ingroup members more often than when the senders were outgroup members. The participants perceived the coalition with the sender who expressed humorous affect when the senders were outgroup members more often than when the senders were ingroup members. The roles of affect sharing in communication processes are discussed.

Key words : affect sharing, group membership of senders, coalition